



Title	大学英語学習者におけるプレゼンテーションの効果 : 動機付けの視点から
Author(s)	西田, 理恵子
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2016, 17, p. 23-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70408
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学英語学習者におけるプレゼンテーションの効果：動機付けの視点から

西田 理恵子 (大阪大学大学院言語文化研究科)

1. はじめに

急速なグローバル化に伴う私達の時代は、国外においては外国語である英語を使ってコミュニケーションを図る場面に直面し、国内においても、多文化共生時代を迎える中で、異なる文化的背景を持つ人々と共生していく力が求められる。大学英語教育においても、時代的背景を見据えて、次世代の人材育成をすべく、自律した学習者を育成し、言語能力を高め、第二言語習得時における、興味関心・意欲・動機づけや言語習得時に関わる情意面を高めていく必要がある。

このような時代の中で英語教育実践として、大阪大学共通教育における実践英語・専門英語基礎・大学英語(Reading)の中で、発信型で自律学習者を支援するといわれるプロジェクト型授業実践(グループプレゼンテーション活動)を実施している。主に、インターネット上での Technology Entertainment Design (以下、TED) を用いてプレゼンテーションを実施している。英語教育におけるプレゼンテーションプロジェクトは、自律して学習し、批判的に考察し、自分の意見を構築し発信していく基盤となりうる。

まず、本稿では、第二言語習得分野における動機付けと情意に関する理論的背景を概観し、プレゼンテーションの教育実践について述べる。更に、TEDプレゼンテーションを用いた授業実践における学習者の動機付けと情意の変化について言及する。

2. 理論的背景

2.1 第二言語習得に関わる動機付けと情意

1960年代からの第二言語習得分野における個人差の研究の系譜を受けている。第二言語習得時における個人差とは主に性格・言語適正・動機・ストラテジー・不安・自信・コミュニケーションへの積極性等があり、動機付けは言語適正と同等に重要であると Dörnyei (2005) は言及している。動機付けの

研究史は 1960 年、カナダ社会心理学者である R.Gardner と共同研究者によって開始され、実証研究と実践報告の蓄積の歴史が、半世紀以上に渡って存在する。1960年代からの研究は主に数量解析を中心とした動機付けや動機付けに関わる要因(統合的態度・学習状況への態度・学習意欲・言語習熟度・言語習得適正・他者のサポート)を明らかにしようとする試みが行われていた(八島, 2004)。しかし、1990年代以降になると、教育現場において、より学習者に根ざした動機付けの研究が問われるようになり「Motivation: re-opening the research agenda」(Crooks & Schmidt, 1991)として、教育現場に即した動機付けの研究が問われるようになり、教育的心理学的理論である自己決定理論・ゴール設定理論・帰属理論等が応用されるようになった。特に内発的動機付けと外発的動機付けを理論的基盤とした自己決定理論(Deci & Ryan, 1985, 2002)に関わる研究は今日においても数多く行われている(e.g., 廣森, 2006; Nishida, 2013; 西田 2013)。2000年以降になると動機付けのプロセスを明らかにしようとする試みが行われるようになり、時間軸を取り入れた研究が行われるようになった。同時に、未来の自己像に関する研究(可能自己)も行われている。可能自己は「理想自己」「義務自己」「努力」が構成概念である(Dörnyei, 2005)。2010年以降には「複雑性理論」(Dynamic Systems Theory: Larsen-Freeman & Cameron, 2008)を取り入れて、よりミクロな視点を取り入れた個人内の変化を明らかにしようと試みている。

この他の第二言語習得時における情意要因としては、コミュニケーションへの積極性があげられる。コミュニケーションへの積極性は、他者とコミュニケーションを取る意思であり、文部科学省の示す外国語活動の目的の1つが「コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度の育成」であるために、研究がなされている。またコミュニケーションへの積

極性に繋がる最も重要な要素として Can-Do が予測変数であることが国内の研究によって明らかになりつつあり、小学児童・大学英語学習者のデータで示されている (e.g., Nishida & Yashima, 2009; Yashima, 2002; 2004)。その他に、カナダの心理学者の系譜を受けた EFL 環境での構成概念である国際的志向性がある。国際的志向性には、異文化友好オリエンテーション、異文化間接近／回避傾向、国際的職業／活動への関心、海外での出来事や国際問題への関心をその概念としている (八島, 2004)。

3. プレゼンテーションの英語教育実践

学習者動機や情意面が大学英語学習を通してどのように変化をするのか、変化の傾向を捉え、適切なタイミングで効果的な教育的介入を行っていくことは重要な課題である。発信型で自律学習支援するため、TED を用いたグループプレゼンテーション活動を実践英語・専門英語基礎・大学英語 (Reading) において、学期の中間・期末に行っている。

国内外で、広く知られるようになりつつある TED は、インターネットを通して行われている無料動画配信のプロジェクトである。様々な分野のスペシャリストや分野で尊敬されているリーダー達が、毎年大規模な世界的講演会をバンクーバーで主催している。インターネット上に配信された TED は、100 カ国以上の言語に翻訳され、スクリプトはダウンロード可能である。TED プレゼンターの中には、U2 のボーカル・ボノが反貧困活動 (1 日・1 ドル 25 セントで暮らす人々) についてプレゼンを行っている。またフェイスブック CEO であるシェリルサンドバーグは「組織における女性」と題してプレゼンを行い、その後「Lean In」(日本経済新聞出版社刊) を出版している (詳しくは、ガロ 2014 を参照)。TED はプレゼンターのアイデアや情熱が世界に対する見方に変化を与え、教育・技術・エンターテインメント・芸術・デザイン・ビジネス・科学・世界的問題に至るまで、人々にインパクトを与えるきっかけを作ってきた。更に TED は、インターネット上でのアクセスがあり、iPhone でもアプリがダウンロード可能であるために、言語学習をする上でも非常に有

効なツールであると考えられる。

授業内においては、数多くの TED から学習者の興味関心に合った TED Talks を選ぶために、まず学期の初期段階に、学習者の興味関心の傾向を知るために自由記述調査を実施し、その後、自由記述をコード化し、学習者の興味関心の軸に合わせて TED プレゼンターを選択していく。人文系の学生であれば「教育学」「心理学」「文化」「国際理解」「時事」等の記述を多く示し、理工系の学生であれば「ロボット工学」「宇宙工学」「生物工学」「情報工学」の記述が見られる。TED の実際の例としては医療系の学生であれば「The worlds' killer diet」(予防医学の専門家)「Gift I' ve ever survived」(脳腫瘍を克服した患者)「Before I die, I want to」(友人の死を経験した女性)の TED を選択した。その後、プレゼンテーションの内容に応じて Discussion Topics を提示する。学内イントラネット (Collaborative Learning Environment: 以下, CLE) にリンクを貼り、学生に対しては、英語教室内外での学習を促した。

授業内ではグループを構成し (5 名～7 名)、TED を視聴し、プレゼンテーションの 3 週間前から準備を開始し、授業内でも授業の冒頭にプレゼン準備を行い、中間・期末プレゼンテーション (第 8 週目・第 15 週目) を実施した。視覚教材にはパワーポイントが義務付けられ、グループ全体としての構成を考え、グループとしての「はじめに」「おわりに」を纏める必要があり、個人が必ず自分の意見を発表しなければならないというガイドラインを設定している。ガイドラインは CLE でダウンロードをすることが可能である。

4. 質問紙調査

プレゼンテーションプロジェクトを通じた、動機付けの変化の傾向と情意の変化を捉えるために、2012 年度前期の第 1 週目・第 8 週目・第 15 週目に質問紙を実施した。その後、ボランティアを募って 15 名の学生に対して半構造化面接を実施している。通常授業には、教科書を使って授業を行い、第

8週目には中間プレゼンテーションを実施、第15週目には期末プレゼンテーションを行った。調査対象者は工学部と医歯薬の学生であった。質問紙には、主に自己決定理論に依拠して項目を構成した。自律性・有能性・関係性・内発的動機付け・外発的動機付け(同一視的調整・取入的調整・外的調整)・無動機・理想自己・義務自己・Can-Do Speaking/Listening、Can-Do Reading/Writing、国際的志向性、コミュニケーションへの積極性についての変化の傾向を捉えた。記述統計や分散分析(反復測定)を実施した結果、プレゼンテーションの介入後、自律性・有能性・関係性・Can-Do Speaking/Listening・義務自己・国際的志向性に顕著な肯定的変化を示した。その一方で、成績や報酬のために行う行動に関連する動機付けである「外発的動機付け」(同一視的調整・取入的調整・外的調整)が、プレゼンテーションの介入後に低下する傾向を示した(詳しくはNishida, in pressを参照)。これは、学習者が成績や報酬のためにプレゼンテーションを行うのではなく、楽しいのでその活動をするという「内発的動機付けに」へと繋がっていく可能性を示している。

更に、半構造化面接を15名の学生に行った結果、“Near Peer Role Model”(クラスメイトのロールモデル)のようにうまく英語ができるようになりたいと次の期末プレゼンテーションに向かって近未来を描く学生達の姿や、TEDプレゼンターのように話せるようになりたいと遠未来を描き、将来、成りたい自己像がより明確になっている学生の姿があった。

5. さいごに

本稿では、TEDを用いたプレゼンテーションプロジェクトを通じた英語学習に関する有効性を学習者の動機付けと情意の視点から述べた。TEDプレゼンテーションでは、学習者の動機付けや情意面に肯定的な変化があることが明らかになった。更に、将来成りたい・ありたい自分の姿が明確になるなど、専門分野のスペシャリストやリーダーを見ることで、

将来の自己像を想像するきっかけとなった可能性がある。

今後の展望としては、プレゼンテーションプロジェクトに加えて、ポスターセッションとの併用やiPadを利用したアクティブラーニングを援用することで、更に英語教育を強化していきたい。また教科内容と言語を統合して効率よく学習していくことができるようCLIL(内容言語統合型カリキュラム)の構想やEMI(English as a Medium of Instruction)の応用も、今後検討していきたい。未来を生きる学習者が、グローバル化社会と多文化共生の時代を生き抜くことができるよう、学習者の言語運用能力と情意面を高める大学英語学習における教育的介入を考察していく。

参考文献

- Crooks, G., & Schmidt, R. (1991). Motivation: Reopening the research agenda. *Language Learning*, 41, 469-512.
- Deci, E.L., & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory in human behavior*. NY: Plenum.
- Deci, E.G., & Ryan, R.M. (2002). *Handbook of self-determination*. Rochester: University of Rochester Press.
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- カーマイン・ガロ(2014). TED驚異のプレゼン: 人を惹きつけ、心を動かす9つの法則. 日系BP.
- 廣森友人(2006). 外国語の動機付けを高める理論と実践. 多賀出版.
- Larsen-Freeman, D. & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Nishida, R. (in press). Motivational changes with the integration of project-based design courses with the use of

Technology Entertainment Design.

西田理恵子 (2013). 大阪大学学部生を対象とした第二言語習得時における動機づけと心理的要因に関する研究報告. 平成24年度 TOEFL-ITP 実施報告. 大阪大学全額教育推進機構言語教育部門. 大阪大学言語文化研究科英語部会.

Nishida, R. (2013). The L2 ideal self, intrinsic/extrinsic motivation, international posture, willingness to communicate and Can-Do among Japanese university learners of English. *Language Education and Technology*, 50, 47-63.

Nishida, R., & Yashima, T. (2009). An investigation of factors affecting willingness to communicate and interest in foreign countries among young learners. *Language Education & Technology*, 46, 151-170.

八島智子 (2004). 外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点. 関西大学出版部.

Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86, 55-66.

Yashima, T., Zenuk-Nishide, L., & Shimizu, K. (2004). Influence of attitude and affect on willingness to communicate and L2 communication. *Language Learning*, 54, 119-152.